

花道家・上野雄次 ライブパフォーマンス

# 高瀬舟狂騒曲！

旧遷喬の校庭に舟現る

アーティストが真庭に滞在して作品を制作する「アーティスト・イン・レジデンス」企画です。

花道家・上野雄次さんを招聘し、5日間の滞在制作期間を経て旧遷喬尋常小学校を舞台にライブパフォーマンスを行います。

上野さんはいけばなを即興的な行為芸術としてとらえ、命と死、生と空間の接点を探究する花道家・現代アーティストです。

滞在期間中、上野さんは地元の木材や植物を使って、かつてこの地の生活を支えてきた「高瀬舟」を現代に蘇らせます。日々形を変えていく制作の過程は、どなたでも自由にご覧いただけます。（作家が不在の場合もあります）

最終日には、その舟が町の人たちの手によって舞台に持ち上げられ、舟を花器に見立てた上野さんによる『はないけライブパフォーマンス』が始まります。

会場となる旧遷喬尋常小学校は、これから保存修理工事を迎えます。名建築が歩んできた歴史を大切にしながら、イベント最終日にはいまを生きるアーティストのエネルギーと地域の人々の活気が混ざり合い、この場に新しい命が吹き込まれることを願います。ともに祝祭のひとときを過しましょう。

—実施日— 2026年

2月17日（火）～2月21日（土）  
11時～16時 ※作家不在の場合もあります

旧遷喬尋常小学校 土広場にて公開制作

2月22日（日） 15時～

ライブパフォーマンス開催（参加無料 飛び入り大歓迎）

—会場—

旧遷喬尋常小学校 土広場

—音楽—

A Tribe Called Noiz



## 上野雄次

UENO YUI

1967年、京都府向日市生まれ。思春期を両親の故郷である鹿児島で過ごし、現在も自身の故郷は鹿児島であると考えている。  
19歳のとき、勅使河原宏の竹のインスタレーション作品に強く衝撃を受け、いけばなの世界へと入る。

伝統的な技法と型を学びながらも、当初からその枠を越えた表現——特に現代美術の視点からの花のあり方——に深い関心を抱いていた。以後、オブジェクト・インスタレーション・空間芸術の領域で「花を使った表現」を展開し、いけばなという言葉の限界と可能性を問い続けている。

1999年より、いけばなのインスタレーションにおいて、日本文化における「見立て」の概念が深く関与していることに着目。コンセプトを「しつらい」と名づけ、工芸作家の個展会場やライブ空間などの構成を行う表現活動を開始。多数のアーティストとのコラボレーションを通して、場・花・身体の関係性を構築してきた。

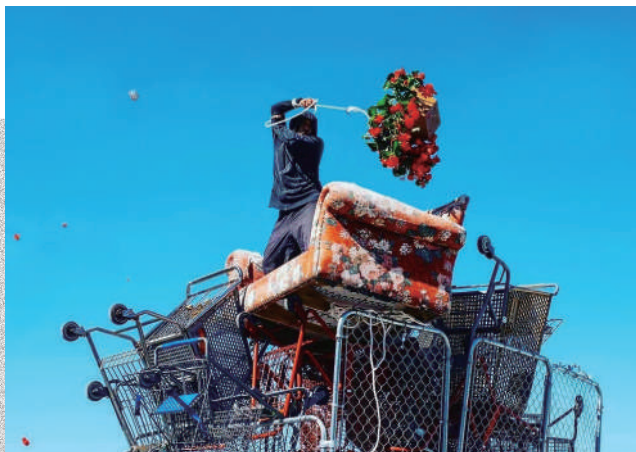
2003年からは、東京・茅場町のギャラリーMAKIの坂巻氏の勧めを受け、空間・時間・素材・身体の交差によって生まれる即興による花いけばパフォーマンスを本格的に開始。舞踏、音楽、建築、現代詩など多分野との共演を通じて、形式化された技術ではなく、「花と生の本質に向き合う行為としてのいけばな」を身体的・感覚的に実践している。

2011年8月、東日本大震災後の混乱と再生の空気の中で、即興表現の根源的な力を社会と共有する方法として、対戦型ライブイベント《花いけばバトル》を立案・主宰（2017年）。その中で上野自身が展開したのが、《Back to Back》スタイルである。この形式は、1人がいけた作品とその場の空気・動作・精神を、次の者がその場で受け取り、順番にいくという即興の構造を持つ。同時性ではなく、応答性・対話性・時間差の緊張を重視するこの構造により、『即興』という行為がもつ精神性、集中力、そして目に見えない影響のやりとりが舞台上に可視化される。これは単なるライブ形式を超え、いけばなの本質を舞台化する実験的かつ詩的な実践として、現在も継続されている。

以後も、国内外の展覧会、パフォーマンス、舞台美術、ワークショップ、教育活動を通じて、いけばなを単なる伝統文化ではなく、精神と存在の問いとしての芸術として深化させてきた。

近年は軽井沢を拠点に、自然と呼応する場所での創作と、自らのルーツに立ち返るような静かな探究を続けている。

著書に『花いけの勘づくら』（誠文堂新光社）、英語版『Ikebana: The Zen Way of Flowers』（Tuttle Publishing）など。NHK「あひち」『美の壺』などのメディア出演も多数。



写真／村田昇